様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ９ 月 ２４ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０３９３

研究課題名（和文）ミクロネシア地域社会の観点からみた太平洋戦争の記憶の動態に関する民族誌的研究

研究課題名（英文）Ethnographic Study on Dynamic Construction of the Pacific War Memory in Local Micronesian Societies

研究代表者
飯高　伸五（IITAKA, SHINGO）

高知県立大学・文化学部・講師

研究者番号：１０６１２５６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ミクロネシア地域社会の観点から、太平洋戦争の記憶の動態を検討することであった。旧日本人移住者とパラオ人の「ハーフ」の慰霊への関与、アンガウル島における日本人慰霊碑の移転、ペリリュー島におけるローカルな戦争博物館の展示、戦争遺跡や慰霊碑の観光化などの事例の検討を通じて、ミクロネシアの人々が、戦後、日米によって独占されてきた戦争の記憶を部分的に受容ないし拒否しつつ、太平洋横断的な広い視野から記憶の再配置を行っていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戦後70年近くが経とうとしている現在、ミクロネシアの地域社会の観点から太平洋戦争の記憶がいかに想起されているのかを民族誌的に解明することを通して、戦争当事国で自明視されている戦争の記憶を再検討するとともに、日本、アメリカ、および現地社会を含めた太平洋横断的な視野から、戦争の記憶のもつれあいを精査しているところに本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to examine dynamic construction of memory of the Pacific War in local Micronesian societies. The investigation of the involvement of Palauans with Japanese ancestry in commemorative activities, the relocation of Japanese war memorial sites on Angaur, the exhibitions at a local war museum on Peleliu, and the commercial tours to battle fields and memorial parks revealed that Micronesians, with pan-Pacific viewpoints, appropriate and even reconstruct war memory, which had been usually monopolized by Japan and the United States in post-Pacific War era.

研究分野：人文学

キーワード：文化人類学　パラオ　サイパン　南洋群島　戦争　記憶

１．研究開始当初の背景

本研究を開始するにあたり、太平洋戦争の記憶が、戦後 70 年近くが経とうとしている現在でも様々なかたちで想起されていることにまず注目した。例えば、アメリカ合衆国では「9.11」のテロ攻撃から「12.7」の真珠湾奇襲攻撃の記憶が喚起されるなど、ポスト冷戦期でもその記憶が鮮明に喚起されている。日本でも戦死者慰霊の問題が、戦後史のなかで様々に問題化され続け、時には政治的論争にまで発展することもあった。

また、これまでの戦争の記憶に関する研究は、日本とアメリカという戦争当事国に焦点をあてた研究が主流であったことを念頭に置いて研究を始めた。すなわち、戦場となることを強いられ、甚大な被害を被ったミクロネシアの人々は、太平洋戦争の記憶をめぐるプロジェクトからは排除されてきたため、かれらにとっての戦争の記憶が十分に検討されてこなかったことに注目した。そして、現地社会の観点の解明には文化人類学的調査が不可欠であると考え、研究を構想した。

すでに欧米のオセアニア研究では 1980 年代末から、現地人の戦争体験が検討されてきた。近年ではマリアナ諸島の慰霊と記憶のポリティックスを検討した K・カマチョの研究 [Camacho, K. *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory and History in the Mariana Islands* (2011)]など、地域社会の観点からみた記憶の政治学に注目する研究も出てきた。

これら最前線の研究と関心、視座を共有しながらも、戦前ミクロネシア地域の統治国であり、太平洋戦争の当事国でもあった日本をベースとして本研究を実施することの意味および独自性を内省しつつ、日本・アメリカ・現地の多様なエージェントによって紡ぎ出される戦争の記憶の動態を、現地調査に基づきミクロネシア地域社会の観点から検討しようと、本研究を着想するに至った。

具体的な調査地域としては、ミクロネシア地域のパラオ共和国と米領自治領北マリアナ諸島のサイパン島を選定した。両地域は、戦前は日本統治下、戦後はアメリカ統治下に置かれたという政治史、太平洋戦争末期に最も過酷な戦場となったという歴史を共有しており、適切な比較検討の対象でとなると考えた。

２．研究の目的

本研究では、太平洋戦争の戦場となったミクロネシアの地域社会の観点から、戦争の記憶の動態を検討することを目的とした。具体的には、同地域のパラオ共和国と米領自治領北マリアナ諸島のサイパン島を舞台に、戦後世界における太平洋戦争の記憶をめぐるプロジェクトからは排除されてきた現地人が、日米主導で構築された戦争の記憶をいかに受容ないし拒否してきたのか、また日米主導で構築された戦争の記憶の再配置をいかにしてきたのかを明らかにすることを目的とした。

(1) 戦争の記憶の受容と拒否

パラオおよびサイパンに林立する慰霊碑の維持管理に関わる現地人（旧日本人移住者と現地人の「ハーフ」から構成されるパラオ・サクラ会など）の活動に関する調査、およびパラオとサイパンでアメリカ合衆国国立公園部局がすでに運営ないし構想している記念公園（ペリリュー島における旧戦場の国立公園化構想や、サイパンのアメリカ記念公園など）に対する現地人の態度に関する調査を実施した。戦後の日本の慰霊団の活動や、アメリカ国立公園部局による慰霊顕彰に対する、ミクロネシアの人々の態度を解明することによって、日米によるナショナルな戦争の記憶の構築を受容せざるを得ない立場に置かれながらも、ある場面では覇権的な記憶に対して抵抗的な態度をとる人々の実践を解明しようと試みた。

(2) 戦争の記憶の再配置

戦争遺跡の観光資源化、ローカルな戦争博物館の設立、日本人が建立した慰霊碑の移転要求などを通じて、ミクロネシアの人々が戦争の記憶を再配置しようとている実態を解明しようと試みた。具体的には、パラオとサイパンにおける戦争遺跡ツアーに関する調査（パラオのアンガウル島の自然公園化と戦争遺跡整備が行われるに至った経緯など）、現地人が現地人のために建立した数少ない慰霊碑に関する調査、パラオのペリリュー島に建設されたローカルな戦争博物館の調査、近年の日本人慰霊碑移転のなかで顕在化してきた土地問題の調査などを通じて、現地の人々が、日米主導で構築されてきた戦争の記憶を再配置し、独自の記憶を紡ぎ出そうとする様子を解明できると考えた。

これらの具体的事例の検討を通じて、本研究では、戦争当事国として戦後ミクロネシアで記憶のプロジェクトを担ってきた日本およびアメリカとの関係性のなかで、ミクロネシアの現地人が自らの記憶を紡ぎ出していく様子に注目することで、戦争の記憶をめぐるマクロな観点とミクロな観点との節合を試みた。さらに、パラオとサイパンの人々の戦争の記憶という、ローカルな事例の検討を出発点として、究極的には戦勝国のナショナルな枠組みに基づいた歴史認識が阻んできた、戦争をめぐるグローバルな歴史認識構築に向けた方途の模索も念頭に置いて研究を進めた。

３．研究の方法

本研究は、海外での現地調査と国内での補足的な文献調査によって遂行した。海外での

現地調査にはパラオとサイパンを選定したが、これは太平洋戦争の戦場となったミクロネシア地域の中でも、両地域が植民地統治の中心地であったこと、日本統治期に移住者が多く居住していたこと、激戦地となり日米の軍人および日本側の民間人に多大な被害を出したこと、現地社会にも甚大な被害を与えたこと、戦後多くの慰霊碑やモニュメントが建設されたこと、現在では戦跡観光が行われていることなどの共通点があり、研究遂行にあたってより適切な対象と考えたためであった。

現地調査は以下の三つの手法によって遂行した。

(1)インタビュー調査

ミクロネシアの地域社会の観点から、戦争の記憶の動態を検討するために、パラオで日本人の慰霊碑の維持管理をしてきた、旧日本人移住者と現地人の「ハーフ」に対して、集約的なインタビュー調査を実施するとともに、アンガウルやペリリューなど激戦地となった地域の戦跡を現地人ガイドとともに訪問したうでインタビューを実施するなどした。

(2)博物館展示の調査

パラオでは、ペリリュー島にあるローカルな戦争博物館を、サイパンでは、ガラパンのアメリカ記念公園と北マリアナ歴史文化博物館を訪問し、展示物や展示手法の特徴に関する調査と職員への補足的な聞き取り調査を行った。

(3)モニュメント調査

パラオおよびサイパンに建立された慰霊碑の現状を調査するとともに、パラオのアンガウル島で日本人の慰霊碑の移転が行われた背景などを聞き取り調査によって明らかにした。

４．研究成果

旧日本人移住者とパラオ人の「ハーフ」の慰霊への関与、アンガウル島における日本人慰霊碑の移転、ペリリュー島におけるローカルな戦争博物館の展示、戦争遺跡や慰霊碑の観光化などの事例の検討を通じて、ミクロネシアの人々が、戦後、日米によって独占されてきた戦争の記憶を受容ないし拒否しつつ、太平洋横断的な広い視野から記憶の再配置を行っていることを明らかにした。

年度ごとの主な研究成果は以下の通りである。

(1)2012 年度

2012 年度は、パラオでの現地調査および資料収集を中心に研究を進めた。日本人によって建立された慰霊塔の現状について、パラオ国立博物館および芸術文化局の職員らと意見交換を行いながら現地調査を行った結果、慰霊塔は大多数のパラオ人にとって無関係でよそよそしいオブジェでありながらも、日本人とパラオ人の「ハーフ」がコロールの日本人墓地にある慰霊碑の整備をし続けていたり、観光客が降り立つ国際空港のイミグレーションに、若い芸術家が慰霊碑の絵画を描いたりするなど、一部のパラオ人が関与しようとする姿勢が認められた。

また、アンガウル島では、近年地主の要求で日本人の慰霊碑が移転され、新設の記念公園内に再配置された。移転後の維持管理の不行き届きや 2012 年 12 月の大型台風による被害に直面しつつも、やはり同島出身の「ハーフ」の子孫が日本側の事業主体との連絡役になっていることが確認された。

ナショナルなレベルでは、アメリカ国立公園部局の指導によって、戦争遺跡を保存しようとする動きも活発になってきているが、同時にペリリュー島に建設されたローカルな戦争博物館では、近代博物館に見られるようなモノの分類および展示の方法とは異なるブリコラージュ的な方法で、遺物が収集展示されており、アメリカ主導の方法とは異なる方法で戦争の記憶を再領有しようとする動きがあることが明らかになった。

(2)2013 年度

2013 年度は、サイパンでの現地調査と資料収集を中心に研究を進めた。まず、サイパン島北部のマッピ岬（通称バンザイクリフ）およびマッピ山北面の崖（通称スーサイドクリフ）など、日本側の団体や個人（旧移住者や太平洋戦争に従事した軍人・軍属など）によって戦後建立された慰霊碑の現状を調査した。近年では、移住者や軍人・軍属の高齢化とともに、当事者やその家族が現地を訪問しにくくなっている一方で、バンザイクリフなどは韓国人や中国人の旅行客にとって単なる絶景ポイントとして消費されていること、現地の人々の間では慰霊の場所というよりは観光地と位置づけられる傾向が強くなっていることなどが明らかになった。

次いで、太平洋戦争の記憶が刻印されている場として、ガラパンのアメリカ記念公園と北マリアナ歴史文化博物館を訪問し、展示に関する調査と職員への聞き取り調査を行った。アメリカ記念公園は、アメリカ側の戦死者が追悼され、解放者(liberator)としてのアメリカ像が構築される場である一方で、日本統治期の病院の建築跡を利用した北マリアナ歴史博物館は、沖縄出身の旧移住者から寄贈された展示品も多く、日本統治期を中心に植民地史を喚起する場となっていることが明らかになった。双方の施設とも、チャモロやカロリニアンなど現地人の観点からも統治や戦争の体験を提示しようとする意図も認められるが、2014 年の米軍上陸 70 周年を前にして現地社会では慰霊・顕彰への積極

的な関与の動きは少なかった。
　これらの事例を検討することを通じて、現地の人々にとっての太平洋戦争の記憶は、かれらが身を置いた戦時中の避難場や収容キャンプでの体験を参照しながら検討する必要があること、そこに日米が主導するナショナルな記憶の構築を相対化する可能性があることなどを今後の検討課題とした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
①IITAKA, Shingo (2013) "Saipan Town on Angaur Island, Palau: Contact among Micronesian Mine Workers under the Japanese Administration." *The Bulletin of the University of Kochi, Faculty of Cultural Studies Issue* 62, pp.13-24.（査読有り）。

〔学会発表〕（計　５件）
①飯高伸五（2013 年 6 月 15 日）「パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現状と課題」『太平洋諸島学会 第 1 回研究大会』明治大学駿河台キャンパス（東京都）。

②飯高伸五（2013 年 6 月 8 日）「太平洋戦争の記憶のヘゲモニーへの抵抗と日本認識－パラオ諸島アンガウル島の事例から－」『日本文化人類学会第 47 回研究大会　分科会「日本認識の形成からみた植民地支配、戦争の記憶－台湾、韓国、パラオ、中国から－」』慶應義塾大学三田キャンパス（東京都）。

③飯高伸五（2013 年 5 月 26 日）「旧南洋群島における日本人移住者と現地人の「ハーフ」がたどった戦後史」『日本台湾学会第 15 回学術大会　分科会「台湾とパラオにおける植民地経験 －接触領域にみる「日本」－」』広島大学東広島キャンパス（広島県）。

④IITAKA, Shingo. (July 14, 2012) "Palauans Singing "Asadoya Yunta": Remembering Contacts among Mineworkers in Ngardmau, Palau under the Japanese Administration." *Transoceania 2012: Currents of Memory, Identity, and Representation between the Islands of Japan and Oceania*. July 14-15, 2012. The University of Tokyo, Komaba Campus. Tokyo, Japan.

⑤IITAKA, Shingo. (June 18, 2012) "Reviewing Visual Images of Palau from the Japanese Administration Era." "*Back to the Future": Palau's Japanese Era and its Relevance for the Future*. Open Symposium by Palau Community College, National Institute for Japanese Language and Linguistics (Tokyo, Japan), Ministry of Community and cultural Affairs, Palau, and Japanese Society of Promotion of Science. June 18, 2012. Palau Community College, Koror, Palau.

新聞掲載情報
①飯高伸五「交差するまなざし―土方久功とパラオの人々〈下〉―」『高知新聞』2013 年 8 月 26 日。

②飯高伸五「交差するまなざし―土方久功とパラオの人々〈中〉―」『高知新聞』2013 年 8 月 25 日。

③飯高伸五「交差するまなざし―土方久功とパラオの人々〈上〉―」『高知新聞』2013 年 8 月 24 日。

アウトリーチ活動
①IITAKA, Shingo "Micronesians' View on "Japan": The case of Palau"（高知県立大学文化学部 日本学レクチャーシリーズにて講演）2012 年 11 月 30 日、高知県立大学永国寺キャンパス。

６．研究組織
(1)研究代表者
　飯高　伸五（IITAKA SHINGO）
　高知県立大学・文化学部・講師
　研究者番号：10612567

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし